

## 昭和の南海地震体験談

氏名: 山下 倫弘 (やました みちひろ)  
生年月日: 昭和11年1月10日  
地震を体験した場所: 海南市船尾・自宅寝室  
当時の家族状況: 父、母、兄、弟2人

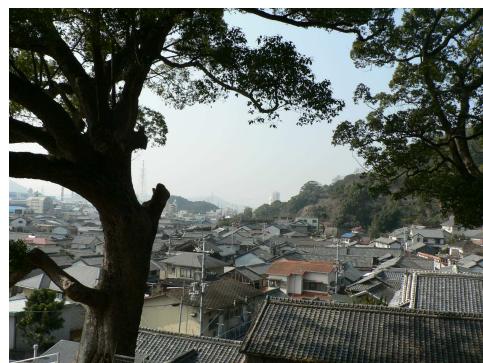


### 1) 地震発生時の状況

当時10歳の小学5年生だった。自宅寝室で家族と一緒に就寝中、突然大きな揺れに襲われ目を覚ました。起き上がり避難しようと思うが、起き上がる事ができない程の強い横揺れで、どうすることもできず、布団の中に横になったまま、揺れが収まるのを待った。ようやく揺れが収まると、津波について知識の高かった父が「この後、必ず津波が押し寄せて来る。その前に海水が引いてくるから、海面を見ていなさい。潮が引き出したらすぐ父に言え」と言い、兄と2人で自宅前の海岸に行った。父は関東大震災やいろいろな事を知っていて「絶対に津波が来るさかいに、おまえら寝たらあかんぞ」と2人に言い付けた。30分程経った頃「ゴオーツ」という音が聞こえてきて、潮が引き出した。すぐに父に報告すると「みんな一緒に山に逃げよう」ということになった。近所の人達をはじめ殆どの方は、起き出すには少し早い時間だったので地震の揺れが収まった後は再び布団の中で休んでいたようだ。山までの避難路だった町の中を、大声で叫び走った。「おーい、津波が来るぞ！山へ逃げろよ！」。半ば怒鳴りながら、周りの人達に避難を呼びかけて走った。小さい弟の乳母車を押しながら、山に着くまで今にも津波が後から被さってくるのではないかと恐くなり、慌ててしまい、2、3度転んだ。避難場所に着くと他にも人が集まっており、30～50人程が避難していた。

### 2) 津波襲来時の状況

避難場所である山の上から海の様子を見ると、今のマリーナ辺りは埋め立てされておらず深い海だったが、そこから冷水、塩津、戸坂辺りの海は、海水が引いてしまって、大きな岩が露わになった海底が見えていた。暫くすると夜明けの白々した西の水平線方向より大浪が黒江湾に向かって来た。その光景を見て、子供だったので怖いというよりも興味や好奇心といった気持ちの方が強く「すごい！おもしろい！」と思った。津波は、その後何回か海南港を押し寄せては引いて、引いては押し寄せてを繰り返した。



### 3) 家族の行動・被害

津波が収まった頃、自宅に戻った。地震後の対処や避難が早かった為、家族全員が無事だった。津波により流された100トンクラスの機帆船3隻が自宅前道路に乗り上げ、舳先が自宅2階部分に突き刺さっていた。戸や家財道具が全て流失してしまい、代わりに大量の泥が残され、その中で鱸(スズキ)や鰻(ボラ)がバタバタと跳ねていた。1階天井下30cm程の所にぐると泥線が付いており、そこまで海水に浸かった跡となっていた。

### 4) 集落・周囲の被害

国道に大きな船が乗り上げていて、海に戻すまで何日もかかっていた。近所は同様に床上浸水の被害を受けた。国道を挟んで自宅のある海側はすぐに水が引いたが、反対の山側はなかなか引かず、数日間も水に浸かったままだった。

### 5) 地震・津波後の生活

自宅の片付けが終わるまで、母の実家で生活した。両親と兄が毎日片付けに行き、田舎の親類も手伝いに来てくれたが、元通りの生活に戻るまで数ヶ月はかかったように思う。子供だった為、水や食料をどうして調達していたのかは判らないが、不自由に感じた事は無かった。畑をしていた親戚に食料を送ってもらったのだと思う。井戸替えをした後も塩分は残っていて、1年程塩味が感じられた。2階部分に突き刺さっていた船を海に戻す日は見学に行った。船の後方をジャッキで上げ、地面との隙間に丸太を入れていき、その上を転がし、移動させ、海に降ろしていた。

### 6) 次の災害への備え

水だけは切らさず常備し、新しいものに入れ替えるよう心がけている。持ち出し袋を作り、家族で置き場所や非常時の避難場所などを話し合っている。

### 7) その他

自宅前が道路を挟みすぐ海の為、港内に浮かべている遊漁船が心配で不安の種である。船による二次災害を受けているだけに、船の数も増えた今となっては、津波の際は多くの家屋を破壊する凶器となるだろう。海を前にして住んでいる者として考えると、とても不安がある。また、地区内の海沿いの公道内に設置されているポンプ場も、津波が来たら確実に浸かってしまい、ポンプが動かなくなる。そうになると水が引けなくなり、船尾山の下まで一面の池になったままだろう。住民の不安が解消できるよう、ポンプ場は移設し、津波対策を講じて頂けるとありがたいと思う。